

研究成果報告書

主研究者	森朋也	所属	教育学部
共同研究者	田本正一、生嶋亜樹子、Perlaky, Denes、金承華、高尾美鈴		
研究課題名			
「西の小京都」の歴史的継承と未来への創造 ～コロナ禍における地域社会の持続可能性～			
研究内容と成果の概要			
<p>本研究は、<u>地域社会が「西の小京都」という地域空間をどのように継承・創造してきたのか、また、コロナ禍を経て、今後、どのように継承・創造していこうと考えているのかを明らかにすること</u>である。</p> <p>「西の小京都」は、歴史と文化の町であり、観光地としても有名な地域である。この「西の小京都」においても、新型コロナ感染症の負の影響を大きく受けており、ポストコロナに向けて、地域の人々は、感染防止の制約の中で再興の道筋を模索している。当該地域において、歴史的に継承してきた伝統文化や基盤産業である観光をいかに将来につないでいくかは大きな課題である。</p> <p>しかし、実は、「西の小京都」の歴史を振り返ってみれば、その概念やその実態は、時代に応じて、多様化・拡大してきた背景がある。本来、「西の小京都」とは、山口の大内氏や津和野の坂崎氏のような武家が京都の自然や文化景観を模して創造した町を意味し、歴史的存在として地域住民の間で継承されてきた生活空間である（「閉じた」生活空間）。しかし、1970～80年代における旧国鉄のディスカバージャパンキャンペーンを契機に、「西の小京都」は歴史・文化的な観光地として発見・創造され、その含意は拡大して観光資源化（開発）が進行した（ナショナルな観光空間）。次に、観光ブームが落ち着き始めた1990～2000年代には、当該地域の歴史的建造物や景観などが文化遺産として保存されるようになった（文化的空間）。さらに、2010年以降は、インバウンド需要の高まりから外国人旅行者を取り込むために、観光地として再発見・再創造された（インターナショナルな観光空間）。</p> <p>本研究は、「コロナ禍」という事象を単に一時点として捉えるのではなく、<u>上記の歴史的な過程の中で捉え、当該地域（山口県山口市、同県萩市、島根県津和野町）が「西の小京都」という地域空間をどのように認識し、何をどのように継承し、新たに創造するかについてアプローチした。</u></p> <p>本研究としては、主に、以下の3つの内容を進めることができた。</p> <p>はじめに、観光についての研究である。森を中心にディスカバージャパン時期に津和野の観光、また町自体がどのような変容を経験し、ときに「観光公害」に抗いを見せたのかをバトラーの観光地ライフサイクル仮説から分析した。この内容は2023年10月に復旦大学のシンポジウムで報告した。加えて、ペルラキを中心にディスカバージャパン以前からの宿泊業の移り変わりも考察した。ペルラキは、宿泊施設の時代ごと、および地区ごとに創業と閉業をデータとして記録した。加えて、いくらかの</p>			

宿泊施設へのインタビュー調査を実施した。この分析結果は、12月3日に立命館アジア太平洋大学での国際カンファレンスで報告する予定である。

二つ目に、津和野における地域資源がどのように過去から現在にかけて創造され継承されているかとい点について、森とペルラキを中心に研究を進めた。一つとして、「津和野の鯉」の研究は論文として執筆することができた（森・ペルラキ、2023）。この研究から、町内では「津和野の鯉」は藩政時代から継承されてきたと考えられているが、実はその存在が町の中で広く認識されるようになったのは、1970～80年代の観光ブーム時であることがわかった。それは、観光産業が鯉を資源として用いる際に、観光客が鯉を鑑賞は良いが「料理」として提供することは看過できないという一つの抗いに起因する。それまでは当たり前存在していた鯉が観光ブームを期に、町と鯉とのあるべき関係性が想起されたのである。この関係性は一つの地域固有の「文化」ともいえよう。また、念仏踊りである「津和野踊り」の研究も進めることができた。こちらの成果物は発表できておらず、現在も進めている段階であるが、台風とコロナで4年間開催できなかった「津和野踊り」が昨年より復活した。森は地元の練習会から参加し、どのように本番までに保存会を中心に準備が行われ、本番を迎えたかを参与観察調査を行うことができた。現段階ではあるが、津和野踊りは多くの若者（津和野高校生を中心に）を迎え入れるように「開かれ」ている一方で、他地域の念仏踊り・盆踊りのように「踊りやすさ」を求めずに伝統的な作法を守っている。この意味で「閉ざされ」てもいる。文化に対する「開かれ・閉ざされ」の正統性について、現在、インタビューを中心に分析を行っている。鯉と津和野踊り双方において、地域の資源や文化を単にそのまま保存しているのではなく、また時世流されるだけでもなく、葛藤ともに継承する姿が明らかになった。

最後に、教育関連では、田本を中心に分析を行っている。コロナ禍における時間において人はどのように自己変容を遂げるのか、自らの「実存」を見いだすのかをハイデガーの議論を基礎に学生へのナラティブインタビューを行った（田本、2023）。現在、森と共に、津和野高校の「総合的な探求の時間」の講義に関わっている。この授業は高校生が津和野の町の課題や自らの疑問を研究として探求するものである。2023年11月8日には山で高校生の研究報告会を実施し、学生が探求した内容について意見を交わす機会を得た。その中ではコロナ禍における観光業や町の経済の行末について研究している学生も多く見られた。この授業を契機に町中へ出向き、町を観察したり、インタビューを行ったり、データを収集したりと、多くの学生が学校の外に学びの場を持つようになった。この意味について、また、学生自身がこの探求を通してどのような変容を経験したかに関して、田本を中心に高校生へのインタビュー調査を実施し、田本（2023）の研究を踏まえながら、「教育と実存」をテーマに研究を進める。

以上の研究を通して、津和野の地域空間の変容は、外生的な変化によってだけではなく、町民の認識や関わりによっても規定されてきたことがわかる。一方で、高齢化と人口減少が進む中で、その認識と関わりというのも縮小せざるをえなくなっている。そのよう中で、津和野高校生の念仏踊りの参加や「総合的な探求の時間」は、津和野の地域空間への新しい関わりである。ただし、卒業後には多くが進学を理由に県外に出ていく。昨今では「関係人口」の議論もあるが、コロナ禍で以前よりも町への関心が向いた若者との「関係」を構築するか、また、卒業後にいかに続けていくか。この課題に高校側からだけではなく、町からも積極的にアプローチすることが重要であると考えられる。

研究進捗状況・研究成果の公表状況等

論文、学会等発表、実データの利用状況、研究の有用性を広めるための活動など

執筆物（論文、出版物）

- ・ Perlaky, D. and T. Mori ‘Rural Tourism and sustainability,’ *Handbook of Japanese Tourism* (in print).
- ・ 森朋也、ペルラキ・ディーネッシュ（2023）「津和野におけるコモンズとしての鯉の生成」『中央大学経済研究所年報』第 55 号, pp 203-231.
- ・ 田本正一（2023）「学びにおける自己変容と時間の関係についての実存論的考察－本来的自己としての学びの可能性－」, *Journal of Eastern Asia Identities*, Vol. 9 (in print).

学会・研究会報告

- ・ 田本正一「学びにおける自己変容と時間の実存論的考察－本来的自己としての学びの可能性－」、日本カリキュラム学会第 33 回全国研究大会（於名古屋大学）、2022 年 7 月.
- ・ 田本正一「ディベート学習における自己変容の実存論的考察－ハイデガーの時間論を足場として－」、全国社会科教育学会第 71 回全国研究大会，福岡教育大学，2022 年 10 月.
- ・ ペルラキ・ディーネッシュ、森朋也「津和野の観光研究」、研究成果報告会（於島根県津和野藩校養老館）2023 年 8 月 25 日.
- ・ 田本正一「「村の五年生」におけるコンフリクトの意義－正統的周辺参加からの考察－」、日本社会科教育学会第 72 回全国研究大会，筑波大学・東京学芸大学，2023 年 10 月.
- ・ 森朋也，ペルラキ・ディーネッシュ，金承華、「「ディスカバージャパン」と「心の発見」－「鯉の住む町」津和野を事例に－」第四回中日若手研究者フォーラム 地域研究としての日本研究－ディシプリン・理論・方法論、2023 年 10 月.

その他特記事項

--